

美しき視野

尾崎喜八詩文集 6

創文社版

尾崎喜八（おぎき・きはち）

1892年東京に生まる。

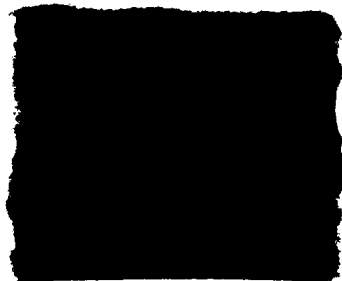
日本現代詩人会，日本山岳会会員。

創文社刊行書：「尾崎喜八詩文集全九巻」，「夕べの旋律」

「その空の下で」，「田舎のモーツァルト」訳書：デュアメル

「わが庭の寓話・動物譚と植物誌」，ヘッセ「画と随想の

本」，バグダール「牧場の本」



尾崎喜八詩文集 6

0395-992060-4226

昭和34年8月30日 第1刷発行

昭和47年6月30日 第4刷発行

定価 980円

著者 尾 崎 喜 八

発行者 久保井 理津男

電話（263）7101（代） 振替 東京 92472

発行所 株式会社 創 文 社

〒102 東京都千代田区一番町17

落丁・乱丁本は取替えます

堀内印刷・橋本製本

目

次

高原曆日（一九四六年—一九四七年）

到着

恢復期

野薔薇

森のオルフォイス

真夏の散歩

晩夏

音楽会

野鳥と風景

冬空の下

美しき視野（一九四六年—一九四七年）

九月の断章

高原初秋

風の音

ホオジロの歌

三 七 二 一 三 二 三 四 四 三 二 一 三 三

菌類一種

エゾゼミ

ちいさい物

ウーロン茶

雲に寄せることづて

雲二題

或る夕べの雲

或る朝の雲

入笠山にて

採集行

別れの曲と到着の歌

湖畔の町の半日

ホトトギス

童話

秋の林にて

背負子

マーテルリンクの朝

四

六

七

九

七

六

六

七

八

八

九

二四

二二

二七

二七

二七

二四

二四

春はふたたび

一四

ベアルンの歌

一四

背負子

一五

山村俯瞰

一六

友情

一八

森の子供たち

一五

碧い遠方（一九四七年―一九五〇年）

店頭の青げら

一九

泉

二〇

初秋の数日

二〇

石の花びら

二九

木苺の日

三五

紫つめくさ

三六

草に寝て

三三

一日の終りに

三七

乾草刈の頃

三四

豆畠にて
落葉掻きの時
蹄鉄工
二月の春
春の雲
寂しさと桜草と
朴の杖
小さい旅人
盛夏白昼
冠 着
初秋の湖
老の山歌
西穂高
入笠山
草山のはて
入笠小屋

二五〇
二五三
二六一
二六七
二七〇
二七五
二七八
二八二
二八五
二八六
二九四
三〇〇
三〇五
三二〇
三二三
三二六

或る遭遇

三二

秋の隣人

三六

初冬の客

三三

柿

三七

初心者

四〇

輝石

四六

虹

五三

秋の丘で

五六

湖畔の星

六〇

黄びたきの災難

六五

雛鳥記

七一

黄昏の飛行家

七八

ハドスン的な冬の日

八五

後記

九九

高原曆日（一九四六年—一九四七年）

到着

旅行鞆をさげて汽車をおり、改札口に身を乗り出して迎える娘とかたみに両手を握りあい、万感胸にせまればかえって頃には言葉もなく、いそいそと行く我が子のあとに老いたる父親らしく随って、停車場前のちいさい町の坂をくだり、坂をのぼり、蓮華躑躅の咲く丘から郭公の遠音の霞む山手のほうへと、今日からの我が生を托すべき見知らぬすみかへ風薫る高原の道をたどる私であった。

過去は茫々、未来は漠々。ただこの現前の恩寵に私はすがる。それにしても何たる大空、何たる日光、ゆるやかに高まって末は残雪の山々となる何たる裾野の広がりだろう！ その山々を私は知っている。あのいくつかの峯を私は攀じた。最高峯の岩壁に昔八月の烈日は燃え、見わたす四方の国原に積乱雲は夢のように林立していた。ああ八ヶ岳。今私はおんみの深い麓にわけいり、この悔悟と敗残の身をおんみの暗く涼しい森、おんみの清冽な泉に托する。今だ。現前の今だ。然しおんみの頂きに立った青々と遠い過去の日に、この私が、この今である遙かな未来を、はたして予感だにしたろうか。いつかおんみの深く柔かい膝のあいだに顔をうずめて、おんみが

その雲と風とで歌うソルヴェイグの歌に、傷つき疲れた身と心とを優しく揺られる日があるうなど、はたして露ほどでも考えたろうか。太古のものなるおんみの母の額に触れながら、あの青春と自負とに燃えていたかつての私が……

私は祖国を愛した。祖国とはそこに私が生をうけた国土と人との一切であった。歴史に重く、伝統に遠く、その自然と民族との個性をもって世界に伍するに決して憚るところなき「国」であった。私は今でもそれを信じている。同時に私は人類を愛した。しかし私にとって、人類とは畢竟過去現在未来を地上に生きる私自身にはかならなかった。かくありたいとの願望に値する私であり、善と美とへの憧れに燃え、たまたまの悪徳にも拘らずいつかは救われる私であった。しかし、この「人類―私」の觀念が一つの後天的な、抽象的なものであった一方、「日本国民―私」のそれが、止むに止まれぬ本能的な、現実的なものであった事は自由しなくてはならない。ところで私のこの単純な楽天的な理想主義は、祖国と他国との死を賭しての格闘という事実の前に崩壊した。国民が人類かという嚴肅なつびきならぬ対決に面してその弱点をさらけだした。私のうちで血は心情や頭脳に打ち勝ち、理性は本能に駆逐された。私は心から「国難」を信じ、「祖国の急」に身を挺した。響きわたる「武器を取れ！」の喇叭の音に身をふるわせ、愚かのように自分の調べをそれに合わせた。いや、その愚かさによって私は世界の不幸への共犯者となったのだ。自分自身に対する何たる汚辱、平和をおもう幾億の魂への何たる罪！ 祖国が敗れ去る前に私こそすでに壊滅し去っていたのである。世を挙げての突撃の叫びの中で、「遙かにためらいがちに響いた平和、そんなにも涙に重く響いた平和、最後のたたかいの砲煙の上に現れるべき

最初の星」に、私こそ真先に敗れていたのだ……

恥を忍び、おもてを伏せて過去一年、私は影のように生きてきた。罪なき妻を道づれに、流浪の宿を転々とした。敗戦の世はさまざまだった。かつて私と親しくし、私にやささかの友情をつくさせた人々が公然私を罪人と呼び、石をもって衝に私を打った。遠くから私を認めるや、そ知らぬていに道を避けるきのうまでの友もあった。さてまた逢えば町重に冷やかに挨拶して逃げるがように去る友もあった。しかしそれとは反対に手をとって泣き、私を慰め、優しく励ます幾人かの旧友もあった。そのいずれもが真実であり、そのいずれもが胸にこたえた。そしてこの二つの真実は、過去につながる自分の名の、もはや全く邪魔物であることを深く私に信じさせた。亡びる者に名は要らず、よみがえる者にそれは新しい重荷であろう。私は死者として忘れ去られ、復活者として全く無名に生きたかった。この世に対しては言うまでもなく、苦楽を共に妻にさえ。我が子にさえ。

そして今、その我が子に導かれて、あすの復活をたのみながら見知らぬ道をたどって行く私である。今は昔、十年前の早春に、まだ幼かったこの子を導いて一つの登山を完成させた事があった。その時私は詩に書いた、

「そうして今度は、あわれ、お前が手をとって、
私のために行くべき道を教えてくれるだろうか」

と。見よ、その言葉は識^{しん}をなして、今私はおぼつかない復活への山道を同じ我が子に導かれて
いる。

見るかぎり柔かな爽かな新緑にうずもれて、白い揺籃のような雲をうかべ、讃歌のような峯を
つらねた裾野の風景。人影一つ、家一軒見ることのない黄いろく乾いた道のとりに、さまざま
な花が咲き、いろいろな蝶がきらきらと飛ぶ。と、娘が立ちどまり、高原の日に焼けた片手を伸
ばして指さしながら優しく言う、「あそこがそうよ。あそこに見える白樺や唐松のまじった赤松
の森。あの中にこれからお父さんの住むお家^{うち}があるのよ」

そうか。あそこか。それではあそこでこの私が救われるのか！

ああ、森よ、お前のその新緑のふところ静かに敗残と悔悟の私を抱き取ってくれ！ おんみ八
ガ岳とその広大な裾野よ、釜^{かま}無^むの山々と谷々と富士見高原のすべての村よ、私に恵んで復活にま
で救ってくれ！

そして、ああ、かなた銀色にかすむ道の奥に、わがなつかしい蓼科山が、幾年失踪の子を待つ
母のように爪立っている……

恢復期

森のなかの庭に面した古い別荘の裏座敷。いく間をへだててここまでは人の声もとどかない。賑やかな小鳥の合唱にはのぼの明ける初夏の朝と、新緑に重い深遠な昼と、星ぞらの下の鬱蒼たる夜。こうして日が過ぎ、過が過ぎる。私はおもむろに恢復期をたどっている。傷ついた心と疲労した肉体とが虚脱の底から緩やかな曲線をえがいて昇る、あの甘美な、感傷的な、明暗も柔かな恢復期を。

しんとした真昼どき、その静寂をいっそう意味深いものにする森のせんだいむしくいやりびたきの囁りを聴きながら、私は涼しい裏座敷でうつらうつらとまどろんでいる。この一と月、東京で片方の眼をわずらい、そのための偏頭痛に悩まされてきた。今では苦痛も薄れたが、ここ富士見高原の強烈な日光の刺戟をおそれ悪いほうの眼に眼帯をかけている。先刻また少し痛んだ。それで冷電法をして横になった。海拔三千尺、快晴の日の昼さがり、日なたは暑いが木蔭の屋内は爽かに涼しい。私は薄い搔卷をかけてもらって仰臥している。

縁先に垂れた煙のような紗の幕が、庭の地面や樹々の葉から日光の反射を柔かにうけて霞んで

いる。机の上には重ねて載せた「ゲーテとの対話」と、ソローの日記と、ウィルジールの「農事詩」と、スイスの高山植物の原色図鑑。壁には大きな葡萄籠を背負ったヘルマン・ヘッセの穏かに秋めいた横顔の写真。そして廊下との界には白と灰青色の市松模様を織出したリンネルの幕。こうした単純な快適な装置は、すべて妻の配慮によるのである。

床の間にはほんのりと暁の紅をさした早咲の野薔薇の一枝が薫っている。今朝見た時にはその花の黄色い薬のかげに一匹の小さい美しい草色の蜘蛛が平たく身を伏せ、左右の足を三日月形に張って近づく獲物を待っていたが、それは今でもじっとしているだろうか。縁側には籐の脇掛椅子が置かれ、小さい卓には明色の胡桃の角材を掘りくぼめた巻煙草入が載せてあり、底にヒヤシンスの花を密画で描いた、そしてチョッキのポケットにさえ納まりそうな、白い可愛い陶器の灰皿が添えてある。これらはいずれも娘とその夫との心づくしだ。そしてその胡桃材の函の蓋をとると中には巻煙草が詰まっていて、蓋の裏には白い油絵具で *Bienvenu* の文字が書いてある。「よくぞ来ませし」と父を迎える優しい心を、むざとおもてには現さず床しく秘めた函である。

私は大きな捧げ物のようなこの座敷で軽い搔卷に襟をうずめ、仰向けに寝てうとうと夢を見ている。私はどうやら少年フランシス・ジャムであり、ピレネエの山々に近いポオカオルテズの田舎道で、白い煙のような紗の捕虫網を手に、さっきから一羽の蝶を追い廻している。ところがその蝶というのが、中年を過ぎたヘルマン・ヘッセがある年のクリスマスに人から贈られたというマダガスカルだかボルネオだかの王者のような巨大な蝶で、玉虫色の光を放つ前翅を持ち、後翅は長い燕形の尾を備えて純粋な金色に輝いている。至福な夏と長い休暇、厳格なこわい父は隅